

略 歴

武 藤 浩 史

生地・生年月日 1958年5月25日に東京世田谷区の国立第2病院にて母武藤順子、父武藤任の次男として誕生。兄に清、妹にゆかり。

学 歴

- 1965年 世田谷区立松原小学校入学
- 1971年 私立武蔵中学校入学
- 1974年 私立武蔵高等学校入学
- 1977年 慶應義塾大学文学部入学
- 1984年 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程入学
- 1987年 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程入学
- 1990年 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
- 1995年 英国ウォリック大学大学院比較文学・英文学専攻博士課程入学
- 2002年 英国ウォリック大学大学院比較文学・英文学専攻博士課程修了
(Ph.D. 取得)

職 歴

- 1990年 慶應義塾大学法学部専任講師
- 1994年 慶應義塾大学助教授
- 1999年 慶應義塾大学通信教育部学習指導副主任 (2003年まで)
- 2000年 慶應義塾大学教授
- 2003年 慶應義塾外国語学校主事 (2005年まで)
- 2004年 慶應義塾大学教養研究センターコーディネーター (2021年まで)

- 2005 年 慶應義塾大学法学部学習指導副主任 (2007 年まで)
2007 年 慶應義塾大学法学部学習指導主任 (2009 年まで)
2008 年 慶應義塾大学教養研究センター副所長 (2010 年まで)
2009 年 文科省大学教育推進プログラム【A】(教育 GP)「身体知教育を通して行う教養言語力育成」リーダー (2011 年まで)
2009 年 慶應義塾大学法学部日吉主任 (2013 年まで)

著書・翻訳

著 書

- 『「ドラキュラ」からブンガク——血、のみならず、口のすべて』(慶應義塾大学教養研究センター叢書, 2006 年)
『愛と戦いのイギリス文化史 1900—1950 年』(共編著; 慶應義塾大学出版会, 2007 年)
『「チャタレー夫人の恋人」と身体知——精読から生の動きの学びへ』(筑摩書房, 2010 年)
『ビートルズは音楽を超える』(平凡社新書, 2013 年)
『英国ミドルブラウ研究の挑戦』(共編著; 中央大学出版部, 2018 年)
『D・H・ロレンス研究——作品・思想・本文校訂』(慶應義塾大学出版会, 近刊)
その他, 共著, 分担執筆多数。

翻 訳

- D・H・ロレンス『海とサルデーニャ』(晶文社, 1993 年)
フォード・マドックス・フォード『かくも悲しい話を・・・』(彩流社, 1998 年)
トム・ベイカー『ブタをけっとばした少年』(新潮社, 2000 年)
D・H・ロレンス『チャタレー夫人の恋人』(ちくま文庫, 2004 年)
D・H・ロレンス『D・H・ロレンス幻視譚集』(編訳; 平凡社ライブラリー, 2015 年)
D・H・ロレンス『息子と恋人』(小野寺健と共訳; ちくま文庫, 2016 年)

マーガレット・ドラブル『昏い水』（新潮社，2018年）

サミュエル・バトラー『エレホン』（新潮社，2020年）

その他，論文・発表・講演多数

ダンス公演

黒沢美香&ダンサーズ公演 *Dance & Show*（出演），綱島温泉東京園にて，2011年1月

黒沢美香&ダンサーズ公演 慶應義塾大学日吉新入生歓迎行事「Dance Live——先ず獣身を成して後に人心を養う」（企画および出演），慶應義塾大学日吉キャンパスイベントテラスにて，2011年5月

「淵と谷と頂」（自作30分ソロ作品）「ダンスがみたい」新人シリーズ10（出演），神楽坂 die platzeにて，2012年1月

ミカヅキ会議公演「渚の風〈聞こえる編〉」（出演），黒沢美香企画および振付，文化庁主催「踊りに行くぜ」ダンス公演，鳥取，東京，福岡，京都と全国ツアー，2014年1月から3月

ミカヅキ会議公演「渚の風」（出演），黒沢美香振付，三田文学スペシャルイベント2014「カラダを動かすコトバ」，慶應義塾大学三田キャンパス東館大会議室，2014年12月

その他，自作自演あるいは黒沢美香&ダンサーズの一員として出演多数

受賞

2011年11月 義塾賞（著書『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』）

あふれだす思い出——慶應義塾大学法学部とわたし

序：鈴木透君のこと

選定年制度を利用して仕事を辞めることを2021年夏に決めて、岩谷前学部長、奥田前日吉主任に事情を話して了解をいただき、英語部会にも報告をした後で、法学研究編集委員会委員の鈴木透君からeメールがあり、『教養論叢』2022年の号を他の退職者とともに武藤の退職記念号にしてもいいかという用件とともに、心のこもった温かい言葉をいただいた。それを読んでいるうちに、「思い出がわたしに立ちあらわれた」。

鈴木君とは塾法学部に奉職したのが同時期である。頭蓋骨の形がアントニオ猪木そっくりで、猪突猛進の匂いをぶんぶんさせた青年だった。その直前から太田昭子さん、辻幸夫さん、横山千晶さんがすでに法学部の教員になっていたの、若いころはこの5人でよく食事をした。鈴木君だけ十歳近く若く、彼がグループのマスコットの存在だった。このマスコットはよく食べた。大皿の料理を頼んで、料理が余ると、必ず、「じゃ、残りは全部たいらげてね、鈴木君」と言うのが習慣になった。「えっ、これ、また、ぼくが食べるんですかあ？これ全部ですかあ？」とぼやきながら、嬉しそうに、わき目もふらずに、スペアリブにかぶりつく往時の鈴木君の姿がよみがえってきて、しばらく、その記憶に浸っていた。名著『食の実験場アメリカ』の著者はすでにあの時、あのガツガツ食らう彼の脳と胃袋の中に潜んでいたのだ。こういう優秀な同僚と同じ職場で仕事させてもらったのは実にありがたいことである。

さて、思い出とは常に自分が覚えていることである。さまざまな事柄について自分が覚えていることである。しかし、意外に忘れてるのが、自分についての思い出で、今回退職に当たり、よみがえってきたこともあるので、以下、自分について——そして、その流れの中で、知り合った人たちについて——自分流に書き記す。もちろん、あのフランスの小説家のように長くなりすぎてはいけない。できるだけ、手短に。

誕生

1958年5月25日に、母武藤順子、そしておそらく父武藤任の次男として生まれた、「おそらく」と書いたのは、母は大変魅力的な女性で、他に年下の東大生の「彼氏」がいたからである。しかし、それでも「おそらく父武藤任」と記したのは、彼とわたしが非常に思考法が似ていたからである。そこに遺伝子の共有を感じないわけにはいかない。「おそらく父」だった武藤任は碩学ではなかった。緻密な考え方をするというタイプでもなかった。それほど努力家でもなかった。ただ、彼の直観的な思考は無比であった、と言っておかなければならない。世界の現状を分析して結論を出すそのスピードと洞察は並大抵のものではなかった。だから、戦前に学んだ大学では左翼思想に傾倒し、戦後はおそらく共産党の地下活動に従事して、かつ実業家としてもそれなりに成功し、政治家とのネットワークを作ることができたのだろう。しかし、本当は学者になりたかったといつもいつも言っていた。指導教授にマルクス関連の文献の下訳を頼まれたことが彼にとって人生の大切な思い出だった。そして、おしゃべりだったので、世界のこと、社会のこと、人間のこと、自分のことを、家の食卓で巨人戦の野球中継を見ながら、とうとうと語った。「ヒロシ、人間っていうものはな……堀内っ、そこ、カーヴじゃないだろ！ たく、いったい何やってんだ……で、ヒロシ、社会ってものはな、唯物史観ってのがあってな……」あれがわたしにとって、最初の「授業」だったように思う。彼には社会主義の魅力も欠陥も分かっている、同時に、彼は日本の戦後資本主義の成功を体現してもいた。あの「授業」に匹敵するものは、その後、研究職を志して、大学院で第一線で活躍する先生方に教えてもらうまで、なかった。そして、父もまた大変女性にモテたので、なぜか子どものわたしは、父と母から別々にそれぞれの恋愛譚を聞かされることになる。母には「わたしが本当に愛しているのはパパじゃないわ、W. D. さんよ」と告白され、父からは「たくさんの女の人がパパに言い寄ってくるのに、みんな最後はいつもひどいことを言って、去ってゆく。ヒロシ、どうしてだろう？」と相談を受けた。なぜ、2人とも小学生のわたしに相談したのかは分からない。当然、父と母の仲はよくなかったが、2人はそれぞれに幸せそうだった。父は享樂家の一面があって、日曜には家族で旨

い寿司を食べに行った。母にはちょっと突き放すような独特のユーモア感覚があって、家庭には笑いが絶えなかった。子どものわたしは「人生ってフクザツなんだなあー」としみじみと、しかし能天気を感じていた。考えてみれば、そんな子どもが文学研究者になるのは当たり前の話ではないか。

父武藤任が学んだ大学とは、言うまでもなく、慶應義塾大学法学部である。塾法学部で人生の大切なことを学び研究者になりたかった男の息子が塾法学部に奉職したのは、運命の必然だろう。もっとも、わたしはかなり問題含みの性格なので、簡単に慶應義塾に雇っていただけたわけではなかった。その経緯については後で記す。

性 格

興味を持ったことに熱中して、^{マイ・ワールド}代替世界を築き、そこに浸ることを好む、というのがわたしの基本的な性格である。自分で自分らしく自分の世界を作りたい、ということである。そして、干渉を嫌う。したいこと以外については手を抜くという悪癖もある。先年、50年ぶりに小学校の同級生に会う機会があり、当時のことをいろいろ話したのだが、真面目女子から「武藤君、掃除さぼったよね」、「武藤君、調子よかったよね」と突っ込まれた。最初にハマったのは漢字と数字である。5歳の時に、大相撲の番付表と星取表で当時の横綱大鵬の「鵬」の字を知って、「なんて素敵!」と思った。「月」が2つ縦に重なる偏というアンバランスが漢字全体としてより美しいバランスを作る不可思議に陶然とした。「麒麟児」という力士もいた。もろ差しの名人「鶴ヶ嶺」も美しかった。あと、「飛」という漢字の形と書き順に魅了された。食事の時に、食べることを忘れて、手に持った箸で、好きな漢字を空中に書き連ねて、両親を心配させた。漢字に数字がミックスされると魅力はさらに上がった。スポーツ新聞に掲載されるプロ野球のゲームのスコアやら、打率順位表やら、球団順位表やらに夢中になって、『東京中日スポーツ』新聞を取ってもらった。あとは、鉄道の時刻表である。交通公社発行の大型版を毎月買って、駅名を覚えたり、それぞれの列車の平均速度を計算して、お気に入りの特急列車がライバルに負けていると悔しがったりした。物語のたぐいの本はほとんど読んでいない。ただ

し、『ウルトラマン』を見て、ずるがしこく振舞って仲間を裏切るのが一番いけないことだというのは肝に銘じた。

青春

中学に入って、理系の科目を重視する学校だったので、物理と生物が面白くなった。宇宙の歴史、生き物の歴史、人間の歴史、「われわれはどこから来て、どこに行くのか」について、その始まりから終わりまで知りたくなった。ところが、3年生ぐらいになると、自然科学の理屈で攻めてゆくやり方が物足りなくなる。人間の裏表、本音と建て前、知と感情、好きと嫌いなどさまざまな要素が干渉しあって、錯綜した人生模様、人間関係の入り組んだタペストリーを編んでゆく、その様子を精確に捉えるには芸術が必要だと思うようになってくる。父に「お前もそろそろ漱石を読むころだな」と言われたのも契機になったのだと思う。学校の帰りに通学の際の乗換駅だった新宿で電車を降り、大きな書店に入って、人生の謎に答えてくれそうな本を探した。覚えているのは、ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』と太宰治の『晩年』とカントの『純粋理性批判』を一気読みして端的に解答を見つけようとしたことである。前2者には心から感動したが、カントは『広辞苑』を片手に読んで、結局、理性と悟性の違いが分からなかった。「理性」を引くと「悟性のこと」と書いてあり、「悟性」を引くと「理性のこと」と書いてあったからである。しかし、ニーチェの音楽賛美、身体賛美、舞踏賛美は、その後、クラシック音楽に夢中になり、D・H・ロレンスを中心に研究し、50代にしてダンサーとしてデビューすることにも繋がってゆく。（そう言えば、小学生の時に家のステレオで『カルメン』序曲のレコードをかけて踊るのを好んでいた。あれが、『カルメン』好きのニーチェへの導入となったのか？）音楽好きの母にねだって、いろいろな演奏会に出かけ、さまざまな名演に出会った。渋谷の新しいNHKホールのこけら落としにNHKが招聘した1973年カラヤンとベルリン・フィルの公演は大人気で、20枚葉書を送ってやっと2枚当たったので、安い値段で、ブルックナーの7番とベートーヴェンの『エロイカ』を聴いた。両方ともカラヤンの十八番で、壮大なクライマックスとともにブル7冒頭トレモロの静謐さに驚嘆した。その翌年

には民音が設立 10 周年を記念して招聘したバイエルン国立歌劇場の来日公演があり、音楽監督ザヴァリッシュの振る『ヴァルキューレ』と若き日のカルロス・クライバーが振りギネス・ジョーンズが歌う『薔薇の騎士』で本場のオペラに接して腰を抜かし、さらに 1975 年にはやはり NHK ホールでベームとウィーン・フィルのベートーヴェンを聴いて、魂を震わせた。ベートーヴェンを知れば人生が分かると信じていた節があって、たしかに、ドイツのピアノの巨匠ヴィルヘルム・ケンプのリサイタルを全身耳にして聴いていると、『熱情』の第 3 楽章で、「武藤くん、社会に迎合して生きちゃいかんよ。自分らしく生きなさい」という啓示が聞こえてきた。わたしの人生で随一のブルースト的瞬間である。(後年、許光俊さんにいただいた『世界最高のピアニスト』を読んだら、ケンプの話が出てきて感動した。許さん、ケンプのライブは本当に凄かったっす。)

で、「社会に迎合しないために」、とりあえず、学校に行くのをやめた。朝、家を出る。外で公衆電話から学校へ連絡して、欠席を伝える。下北沢のジャズ喫茶に行って、本を読む。コルトレーンやマイルス・デイヴィスの轟音の中、いっばしのアウトサイダー気分で、カミュとかヘッセとかドストエフスキーとか読むと、ずっと頭の中に入ってくる。ジャズ喫茶は最高の学習環境だった。不登校という言葉も登校拒否という言葉もないところで、パイオニア気分でしたら、すぐ近くにうわ手がいた。父の書斎に呼ばれたのである。父の前に座らされ、父が「ヒロシ、お前、最近、学校に行っていないそうだな」と重苦しい口調で言う。父は巨軀で、わたしよりはるかに強そうである。「やばいな。殴られるかな」と思った。

すると父は言った。

「じつは、おれも学校に行かなかったんだ」

わたしは心底ほっとした。そして、思った——「なんだ、遺伝子じゃん」

父はつづけた。

「ヒロシ、学校って下らないと思うだろ」

うなづくわたし。

「学校の教師はバカだと思うだろ」

ふたたびうなづくわたし。

一瞬の間のあとに、父がまた口をひらく。

「学校ってのは、そういうところだ。世間っていうのも、そういうところだ。社会のシステムなんてみんな下らないものだ」

沈黙。

そして、

「ま、そんなもんだと思って、社会とはテキトーに付き合っけ」
と言われた。

それで放免された。

この言葉に救われた。父は、ケンプの弾くベートーヴェンのメッセージにさらに分かりやすい注釈あるいは補足を加えてくれたのである。父のおかげで、わたしは自分を飲み込もうとしている社会に対して強靱なメタ的視点を持つことができて、社会と「テキトー」に付き合っていくことを学べるようになった。慶應義塾大学法学部で社会の真理を学んだ父がそれを思春期の息子に分かりやすい言葉で伝えた、とも言えるのではないか。もちろん、子というのは忘恩の徒であるから、そのことで父に感謝の気持ちを伝える前に父は死んでしまった。しかし、大切なのは親に感謝することではなく、その大切なメッセージをさらに自分の子に伝えていけばいいのではないかと、忘恩の徒の開き直りかもしれないが、今のわたしは思っている。

あと、家に仏壇があって、その引き出しに『般若心経』の冊子があり、漢字好きのわたしはその読経を好んだ。「色即是空、空即是色」と声に出してゆくと、ブルックナーの音楽のように宇宙が鳴り響く思いがした。特に陶然としたのは、「無無明亦無無明盡、乃至無老死、亦無老死盡」のくだりで、「なんだカントじゃん」とも思った。(ちんぷんかんぷんだった岩波文庫の『純粹理性批判』にここでリベンジ。ところで、漢文の授業の教師とはウマが合わず、期末試験の答案に「チンブンカンブン」とだけ書いて、10段階評価の1をもらい、問題化した。)

学校と「テキトー」に付き合うことを覚えたわたしは、学校の規則ギリギリの出席数で進級した。で、次にとりあえず、やってみようと思ったのは、デモに行くこととバーテンダーになって夜の世界を知ること、前者は金大中の拉致に抗議するデモに行ってみた。しかし、行っても20人くらいしかいない。

小学生のころ、テレビで見た、そして、早稲田に通っていた兄も参加したあの学生運動の盛り上がりはもはやなく、「ああ時代が変わったんだな」と思った。しかし、同時に、「キムデジュンをかえせー」とシュプレヒコールを繰り返していると気分が高揚してきて、集団行動の面白さは分かったが、基本的には独りを好む性格から、それ以上、のめりこむことはなかった。後者については、何となく、気後れしてやめた。もしバーテンダーになっていたら、夜の赤坂で父に遭遇していたことだろう。(父が夜の赤坂の「レジェンド」であったと知るのは、もっと後のことになる。出会ったら出会ったで面白かったのかもしれない。)

それから、試験への拒否感・嫌悪感が強く、「社会に迎合しない」という錦の御旗もあって、受験勉強はやらない、と決めた。今でも、試験監督をしていると、狩りで無辜の生き物を殺しているような罪悪感を持つ。だから模擬試験を受けるなんてとんでもない話で、模試を受けたのは人生でただ一回、高3の時の第1回校内模試のみ。「武藤、学校に来てない割にはいい線行ってるじゃん」とか言われたので、それを契機に受験勉強を始めるという選択肢もあったものの、試験への拒否感が強すぎて、模試体験はそこで終わった。サッカー部に入っていたが、おそらく動体視力が悪いのと「マイペース」な性格で周囲を見る観察力を欠いていることから、極端に下手くそだった。だから、ボールは回してもらえなかったけれども、広いスペースを走り回るのは楽しかった。日が暮れかけて、あたりが暗くなって、地面しか見えなくなったところに、グラウンドを全力で駆けると、地面だけ、どんどん後ろに飛んでゆくのが見えて、生きている実感を味わった。(今でも、周囲のことが見えずに、ただ走り回っているだけのような気もする。)

受験勉強はしないと決めたものの、大学受験をするかどうかは決めていなかった。何しろ初めてのことなので、決められないままに、高3の正月を迎えた。元旦に家族で集まった際に、そんなわたしを見守っていた母が静かに言った。

「ところで、お前、受験するのかい？」

静かな表面のすぐ下に一片の剃刀をひそませたかのような口調だった。

不意を打たれて、わたしは思わず、「ああ、するよ」と答えていた。自分の

答えに驚いたわたしは、それから受験先を探しはじめた。老獪な母の作戦勝ちである。しかし、試験嫌いなので、できるだけ早く終わる所がいい。と思って調べると、ベストな選択肢が見つかった。「英語」と「歴史」の2科目だけで午前中に入試が終わる慶應義塾大学文学部である。兄が早稲田に行っていたので、父への対抗心から出来れば早稲田に行きたかったが、昼前に解放されることを考えればこの塾の文学部がベストである。国立も考えて京都大学の願書を取り寄せたが、科目数の多さとともに、2日間に及ぶという試験の長さは耐えがたかった。とりあえず、早・慶・上智かなと思って調べてみたら、上智はすでに願書の締め切りが過ぎていた。で、早・慶を受けて、慶應だけ受かった。ご縁である。(喜んだ塾員の父は、わたしを三田にあるカフェみたいな所に連れて行って、そのママさんを紹介してくれた。その意味は今でもよく分からない。)

慶應義塾大学文学部

しかし、学部の授業はつまらなかった。当たり前の話である。こちらは学校をさぼって、受験勉強もせずに好きな本を読んでいたわけだから、他の学生とは読書量が違う。英語も、趣味で、英文学ばかりか、外国文学も英訳で——たとえば『アンナ・カレーニナ』——チャレンジするのを楽しんでいたから、蓄積が違う。また、わたしには教師の話聴くのがとても苦手という「学習障害」的な側面があり、講義を聴いて集中力がつづくのは20分ほどで、90分授業は、よほどの名講義でないと拷問だった。ただ、大学には個性的な先生がたくさんいるので、1年の時は、変わり者が変わり者に惹かれるように、尾藤先生という中世英文学の研究者に可愛がってもらった。それから、大学は——特にそのころの大学は——授業をさぼっても何も言われなかったので、学校に来るのは週に2日程度で、あとは、相変わらず、ジャズ喫茶に入りびたっていた。(ただ、このころから、ジャズ喫茶の数が減ってきたのが悩みの種だった。)

ところが、昔の大学と言えども、たまに真面目で出席に厳しい先生がいるものである。2年生の英語の授業で当たったK先生がそういう先生だった。テキストはつまらない、授業の話はレベルが低くて、出席だけは厳しく取る、高い授業料を払っているのにこれは「人権蹂躪」ではないか、とわたしは憤った。

そこで、直接行動に出た。ある日、授業の後につかつかと教壇に歩みよると、

「先生、あの、すみません、出席取らないでください」と言った。

わけを訊かれて、

「先生、この授業、つまらなすぎて、出席する意味がありません」と言った。

それから、

「期末試験だけは受けるから、平常点は止めてください」

と付け加えた。

先生はカンカンになって、

「いったい、きみは、そんなに英語に自信があるのかね？」

と言うから、

「じゃ、なんか英文を提示してくれたら訳してみますから、見てみてください
い」

と答えた。

結局、出席は免除になって、期末試験だけ受けた。最後に先生のところに行
って、

「先生、生意気言ってすみませんでした」と言うと、

「キミ。ほ・ん・と・う・に・生意気だねえ」と吐き捨てられた。

単位はもらった。しかし、この一件がその後のわたしの人生を変えることにな
る。

恋もした。後に1回目の結婚することになるNはとても強かった。夏が近づくと「暑いから、そばに寄らないでよっ」と追っ払われた。しかし、彼女の2個の命令がわたしの人生を変える。1つは禁煙である。これで健康になった。2つ目は、なんとなく高校の英語の先生になろうかなと思っていたが、彼女がこれを禁じたことである。おそらく、Nは昔風の高校の英語の授業に嫌な想い出があったのではないか。とにかく、彼女のこの強い介入がなければ、研究職に就くということは、なんか大変そうだから、考えていなかったと思う。(そのお返しかどうか分からないが、Nには自転車の乗り方を教えて、数年前にそのことを感謝された。)後に、彼女はWorld Food Program (WFP)に勤めて、アフガニスタン、イエメンといった危険地を転々とし、2020年にWFPはノーベル平和

賞を受賞した。だから、或る意味、わたしの元妻 N はノーベル賞受賞者であるということも、小さな自慢話として、付け加えておく。

学部4年生の時に、たまたま英米文学専攻の安東伸介先生が特別研究休暇を取ったので、代わりに塾法学部の海野厚志先生が文学部の「英文学演習」を担当することになり、卒業必要単位が不足していたわたしは、たまたま海野先生の授業を履修した。彼は型破りだった。D・H・ロレンスに傾倒して、同時に、曹洞宗の宗祖道元に夢中だったから、D・H・ロレンスと大乘仏教の関係について研究していた。学問的に隙のない議論をする人ではなかったが、その洞察は深く、自分のテーマにかける思いは熱かった。この塾法学部に所属する英文学の先生の授業を取って、わたしの人生は決定的に変えられたのである。

最初に読んだのは、Penguin版のロレンスの *Selected Essays* だったと思うが、そこでロレンスの思想のさまざまな面に触れた。先生は何もかも隙なく覚えている優等生的な人ではなかったので、時々、英語の発音とかが分からなくなる。すると、しばらく考えた後で「ええいっ、こんなことどうでもいいわっ」と小さく叫んで、読み飛ばしてしまう。そこが気に入った。文学部英米文学科に所属する先生方の「英語のアクセントを1つでも間違うと地獄に落ちる」的な細かいこだわりとは大違いである。英米文学専攻で重視される単語の発音とか本文校訂とか古書の話とかは、ニーチェ主義者だった若いころのわたしにはかび臭かったので、自分の人生観を総動員して体当たりで文学のテキストと格闘する海野先生の姿に感動した。面白い先生だなあと考えて、ある日、授業の後に教壇に行き、先生に「ロレンスの思想って、仏教に似てませんか?」と訊いた。

これが海野先生にとって、ど真ん中のストライクだったのだ!

「きみー、そうなんだよ、そうなんだよ」と叫んだあと、海野先生は『正法眼蔵』の「現成公案」の巻冒頭の「仏道をなろうというは自己をなろうなり。自己をなろうというは自己を忘るるなり」で始まる箇所を暗唱しはじめた。「自己をなろうというは自己を忘るるなり」という一節に打たれたわたしがさらに質問を重ねると、先生は水を得た魚のように、いや、狙っていた魚がエサに食いついた時の釣り師のように「きみー、そうなんだ、そうなんだ」とます

ます興奮して、ロレンスと道元の近さについて熱弁をふるわれた。

そして、「そうだ！ きみ、いい所に連れて行ってやろう」と言われて、連れて行かれたのが、泉岳寺の参禅会である。座禅してみると、たしかにロレンスの言いたいことが分かるような気がする。ニーチェと『般若心経』を愛していたわたしが次に読むべきものとしても、道元の『正法眼蔵』はちょうど良かった。海野先生にとっては、わたしは理想の学生だったろうし、わたしの方も、こういうタイプの研究者がいることを知って、目からウロコが落ちる思いがした。「そうだ、研究者になろう。大学院に行こう、ほくもロレンス研究を極めよう」と思った。HOYAとSEIKOに内定をもらっていたが、その内定を断って、大学院の試験を受けた。ただし、塾の大学院はすでに終わっていて、受験可能な早稲田を受けた。ただ、翌春、早稲田に入ってみると、英文科のレベルがあまりにも低く、すぐに辞めて、慶應義塾に戻った。これもご縁である。

塾の大学院は楽しかった。他人の話を聴いて、こんなに面白かったのは、小さいころの父の話以来、なかった。専任の先生だけではない。非常勤講師として日本の最高レベルの研究者が塾に来て、教えてくれる。一定数の専門科目を取れば、それ以外は、自由に講義にもぐることができる。カント研究の坂部恵先生、ハイデガーとメルロ＝ポンティ研究の木田元先生などの講義に刺激を受けて、哲学に対する関心が戻った。北米の大学を經由して、脱構築なる文学理論が日本にも伝わってきたが、その代表者ジャック・デリダについて北米的な捉え方をすることには違和感を覚えて、むしろ、文学理論を、井筒俊彦、ハイデガー、道元、ロレンスとともに考えたいと思った。

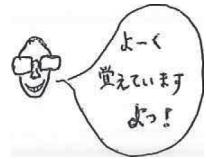
また、英文学では、わたしが慶應の大学院に入った時から、当時活躍中の小野寺健先生が非常勤講師として来てくれた。小野寺先生とはヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』を読んだが、先生にはハイデガーを援用しながらウルフの時間論を論じた期末レポートを褒めていただき、もしかしたら、自分も研究者としてやっていけるかもしれないという自信が生まれた。指導教授の安東伸介先生は大変な芸術愛好家で、その点でウマが合った。先生に命じられて、わたしがベートーヴェン『第9』の‘An die Freude’を歌うと、「何だそのド

イツ語の発音は！」と叱られ、「ぼくがきみの耳元で正しい発音をささやくから、聞こえた音をそのまま口に出しなさい」と言われて、指導教授の熱い息を耳たぶに感じながら、「歓喜の歌」を歌うという貴重な体験もした。研究に関しては大体の方向だけ示していただき、あとは好き勝手にやらせてくれた。これがわたしの性格に合っていた。

で、博士課程に進み、就職先を探す時期が来た。当時の英文科の大学院生には就職口がたくさんあって、他の大学の先生からスカウトの電話がかかってくるもありましたが、安東先生は、塾文学部の教員として推薦してくれた。そこで、わたしは着慣れないスーツに身を包み、最大限に緊張して、最終面接に臨んだのである。すると「あの先生」が面接官の1人としていらっしやった。

学部2年時に生意気な口をきいたK先生である。

「ああ、キミね。よく覚えていますよっ！」



かくして、文学部教員として慶應義塾に奉職する道は断たれた。

ところが、その時、法学部にいた巽孝之先生が文学部に移ることになり、急遽、法学部に空きができた。安東先生はそこに「文学部の問題児」であったわたしを押し込むことを考え、幸い、法学部にわたしのこの問題含みの性格が伝わることもなく、法学部への就職が決まり、働きはじめた。1990年春のことである。またもや、塾法学部に人生を救われた！

慶應義塾大学法学部（初期）——よく叱られ、たまに褒められ

法学部に奉職してからも、最初はいろいろとお叱りをいただくことが多かった。『教養論叢』に関して言えば、「静かな日々、驚きの数々」（1992年）と題したエッセイで、夫婦喧嘩のことを赤裸々に書いて、年配の先生方のひんしゆくを買った。品性に欠けるということだろうか。同僚の間では「変なヤツ」と思われていたに違いない。しかし、その中で、研究の時間を捻出しながら、D・H・ロレンスの紀行文を翻訳し、それが出版され、評価されたことはとても嬉しかった。その時編集者を紹介していただいたのは、塾大学院の授業で出

会った「翻訳の神様」小野寺健先生で、担当してもらった編集者はその後、新潮社に移り、新潮クレストブックスの編集長になった須貝利恵子さんである。こちらの誤訳、下手な訳を次々と指摘されて、優秀な編集者とはかくも凄いものかと驚いた。当時、塾法学部の日吉主任でドイツ文学研究者としても活躍された深田甫先生にも褒めていただいた。

文芸翻訳の楽しさは満喫した。と同時に、翻訳をすると次は論文が書きたくなり、論文を書くとは翻訳をしたくなる性分であることが分かった。2つはまったく違った種類の作業で、脳内の異なった部位を使っている感じがして、交互にやりたくなるのだ。翻訳は決まった設計図に基づいて細部を工夫しながら作り上げてゆく職人仕事で、研究はもっと自分中心の企画・執筆の仕事である。それぞれに楽しいのだが、ロレンスの翻訳を仕上げ、もう1つ、フォード・マドックス・フォードの小説を邦訳して、次は論文を書きたくなった。それも、本格的な、長いヤツを。

そこで、1995年に塾派遣留学に選ばれたのをきっかけに、イギリスの大学で博士論文を書くことにした。時代も、テーマも、研究対象の作家も一新して、19世紀末英文学における「身体なき声」表象の研究を始めた。当時の文化全般、科学全般、社会全般にかかわりながら、英文学の中に未発見の系譜を探し出そうとするチャレンジだった。留学先のウォリック大学英文科の博士課程に入った日本人はわたしが最初で、指導教授のマイケル・ベル先生も、はじめは日本人にきちんとした英文学の論文が書けるとは思っていなかった節がある。「三島由紀夫と比較したらどうだ」とか当たり前のことを言われて、慥然とした。その上、彼は離婚したばかりで、心底傷ついていて、指導中も上の空で、あまりの気の毒さに、抱きしめてやりたいくらいだった。(その後、彼も幸せになった!)しかし、こちらも頑張って、草稿を書いてゆくと、1年半くらいから彼の反応が違ってきた。「おぬし、なかなかやるな」という感じである。それから大変だったが、道は見えてきて、楽しさが倍増した。

慶應義塾大学法学部（中期）——ふたたびの青春

2年間の留学から帰った後は法学部の仕事が山のように降ってきて、忙しく

なった。しかし、博士論文の執筆は帰国後もつづけ、アーサー・シモンズを核とするテーマを設定した第1章、それを元にゴシック文学とコンラッドを繋げた第2章、ワイルドの『サロメ』を分析した第3章、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を精査した第4章、無線電信実験をきっかけに詩人キーツの霊が降りてくるキプリングの短篇「ワイアレス」論の第5章、D・H・ロレンス論の第6章と書きつづけ、最後の第7章はオーウェルの『1984年』に少し触れて締めくくった。‘The “Disembodied Voice” in *Fin-de-siècle* British Literature: Its Genealogy and Significances’ というタイトルの8万語に近い論文が完成した。これを2001年年頭に提出し、同年9月に口頭試問を受け、翌年初めに学位を得た。この長〜い拙論の英語をジェームズ・レイサイドさんに直してもらった恩は忘れない。今は塾文学部英米文学専攻で教鞭をとる後輩の原田範行さんにも大変お世話になった。この仕事を元に、海外の大学出版局からの出版を考えたが、学務に忙殺されて、断念を余儀なくされる。何しろ、週に10コマくらい教えていた時もあったのだ。博士論文からは、『ドラキュラ』を書いたブラム・ストーカー章の内容を元に、短い学生向けの文学入門書『「ドラキュラ」からブンガク』を上梓するに留まった。無念だったが、仕方がない。力不足である。

塾内では、外国語学校主事を仰せつかった。校長は田村次朗さんがしばらく務めて、それから経済学部のバルザック研究者西尾修さんに代わった。西尾さんが急病で、急遽入学式の挨拶をすることになり、何を話したか忘れてしまったけれども、きっと変な話をしたのだろう、あとで学生から「ユニークな挨拶でしたね」と言われたこともあった。職場にはごたごたが付き物である。最近では「ハラスメント」も流行っている。しかし、あまり動じない性格なのか、淡々と仕事をこなして行って、その仕事自体にストレスを感じることはほとんどなかった。2005年から学習指導副主任、2007年から学習指導主任、2009年から2013年までは日吉主任を務めた。日吉主任に選ばれた時も、かえって開き直って、別に重圧を感じるとかいうことはなかったけれども、研究者としてのキャリアについては危機感を抱いて、着任直後の三田祭の休みの間に必死で本を書いた記憶がある。これが『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』として

出版され、この本で2011年の義塾賞をいただいた。がんばったかいがあったというものである。

また、同じ時期に塾教養研究センターの所長に横山千晶さんが就任した。所長になるのを嫌がった横山さんからは、相談を受けた。「ま、男たちが組織の中でどう振舞うのか、サルの集団の参与観察をするつもりでやってみるという考え方もあるんじゃない」とアドバイスした。父からの「社会とはテキトーに付き合え」というメッセージを、女性向けに書き直したみたいの内容である。偉そうにアドバイスをした手前、横山所長の下で、教養研究センターのコーディネーターと副所長を務めて、「身体知教育を通して行う教養言語力育成」という教育プログラムを作り、文部科学省大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム【テーマA】(教育GP)に採択された(2009年度～2011年度)のも、いい思い出である。(ともに副所長を務めた文学部の生物学者中島陽子さんや経済学部の不破有理さん(後に所長)、商学部の種村和史さんとの交流も楽しんだ。)また、教養研究センターと縁の深い同僚の木俣章さんや経済学部の羽田功さんが大野一雄の公演を新入生向けのイベントとして行っていた流れで、大野さんが高齢で来られなくなった後も面白いダンス公演をつづけようという企画があって、意見を求められたので、理工学部のダンス研究者石井達朗さんに相談して、白河直子と大島早紀子、笠井叡、黒沢美香といった日本を代表するダンサー・振付家に、公演・インタビュー・ワークショップの3点セットで依頼するというのを3年間つづけた。とりわけ、2005年に日吉キャンパス来往舎イベントテラスで上演した黒沢美香 & ダンサーズの「jazzzzzz-dance」は、愛と怒りが無いまぜになった女の生命力を内向的に爆発させた傑作で、大きな衝撃を受けた。その後、黒沢美香の公演の追っかけとなり、思いあふれて、2010年には弟子入りを志願した。「ぜひ、稽古に参加させてください」と電話で頼むと、黒沢美香さんは受話器の向こうで絶句していた。

晴れて、黒沢美香 & ダンサーズの一員となり、初めてその本格的な公演に出演したのは、今はなき網島の温泉施設「東京園」の大広間で行われた2011年1月の*Dance & Show*である。人生でこの時ほど緊張したことはない。振りहतくさん間違えたが、見に来てくれた太田昭子さん、片山杜秀さん、横山千

晶さんは腹をかかえて笑ってくれた。ネットにも「教授ダンサー、がんばれっ」みたいな励ましの言葉があがって、気分が高揚した。それで調子に乗ってしまって、次に「ダンスがみたい」新人シリーズという企画に応募して、体を張った自作自演で、ダンス界の新人賞を狙うこととした。2012年1月に「淵と谷と頂」、2013年1月に「矢」という、それぞれ30分のソロ作品を、神楽坂の小劇場で披露した。特に出来が良かったのは前者で、その隠れテーマは父に捧げるレクイエムである。父が好きだった大福を舞台上で頬張ることで、父と一体化して、愛するベートーヴェンの交響曲8番で踊った。振り返ってみれば、その動機の強さから名作が誕生するが高かったのは容易に想像し得ることだった。NYのアポロ劇場への出演経験者など、その道のプロの人たちと並んでも遜色はなかったようで、観客の圧倒的支持を得、劇場の人には小声で「武藤さん、これ(新人賞)イケますよ、イケますよ」とささやかれた。黒沢美香さんからは「素人にこんなことやられたら、プロはお手上げ!」と褒めていただいた。結局、中年男のめっちゃくちゃダンスには審査員の間で評価が分かれたようで新人賞は逸したものの、その1人、ダンサーの上村なおかさんは「個人的に今回もっとも身体をふりしぼって「ダンス」していた人。ほとぼしっていた。身体の喜びを見た。見終わった帰り道、わくわくしたままだった。プラボー!」(https://www.d-1986.com/s10_c.html)とコメントしてくれた。ここが舞台人としてのわたしの人生の頂点となる。それを目撃した法学部の同僚は佐藤元状さん、横山千晶さん、北澤安紀さん。どうして、三田の北澤さんがといぶかしむ御仁もおられるかもしれないが、入試の仕事を一緒にして以来、北澤さんとわたしは心の友なのだ(とわたしは固く信じている)。

とにかく、さまざまな法学部の校務に従事したことでいろいろな人たちと親しくなれたのは何よりだった。いつも体を鍛えていた山本信人さん、いつも冗談を言っていた高橋伸夫さん、いつも何かぶつぶつ言っていた山本爲三郎さん、大勢の前でのスピーチとパフォーマンスが見事だった国分良成学部長、大学運営に関する判断が的確で清家塾長の信頼厚かった大石裕学部長、挨拶は苦手だがさまざまな形で「縁の下」から学部運営を支えてくれた萩原能久さんなど、三田の個性的な面々とも知り合えた。しかし、法学部で出会った教員の中から

1 人を選べと言われれば、多くの日吉の先生方の顔が浮かぶものの、最後は、迷わず、日吉主任を 4 期 8 年にわたって務めた「天才詩人」朝吹亮二さんを選ぶ。朝吹さんにはとてもお世話になった。朝吹さんは、大変な褒め上手で、おだてられると調子に乗るわたしのことがよく分かっていて、「武藤君、ナイス、ナイス」と、天才詩人にあり得ない長嶋茂雄みたいな言葉遣いでおだててくれた。また、わたしが日吉主任を務めていた時はひどく心配もさせられた。朝吹さんは天才詩人にはあり得ないほど教育熱心で、大きな脳梗塞で倒れて入院とリハビリを余儀なくされた後にミニ梗塞が起きた朝、「武藤君、ちょっと今日の朝、手がしびれるんだけど、大丈夫だと思うから、出講します」とメールをもらって、腰を抜かすほど驚いた。ご自宅に電話して奥さんと話しても、「本人が頑固ですから」と埒が明かない。国分さんに「学部長命令で出講を禁止します」とメールしてもらっても、動じる気配がない。結局、本人は、しびれる手で、日吉に来てしまって、わたしを見ると、カバンで顔を隠して、照れながら謝る素振りを見せながら、「ごめん、ごめん、でも、大丈夫だから授業をします」と言う。具合が悪くなった時の緊急連絡用に今はない PHS を持って教室に行ってもらい、わたしは他所で待機した。生きた心地がしなかった。塾法学部での 30 余年の勤務の中で一番参った瞬間である。退職後の今はとてもお元気そうで、何より。

と書くと、同時に、別の「思い出がわたしに立ちあらわれた」。在職中に、あるいは、退職直後に逝去された法学部の先輩方である。定年を迎える直前に亡くなられた恩師海野先生は「きみー、最近、車を運転していると物が二重に見えるんだよー、はっはっはっー」と笑っておられた。あの時、病院に行ってもらえばよかった。それから、日吉主任在任中に亡くなられた明るいムードメーカーの筑紫文耀先生、そして、ご退職直後に亡くなられた音楽評論の分野で活躍された岩下真好先生。合掌。

しかし、朝吹さんから久しぶりの詩集『まばゆいばかりの』をいただき、それを読んだ時の感動は忘れがたい。饒舌に見えながら、細部において信じられないほどの精確な完璧さを示す箇所があるのは、「日本のジェイムズ・ジョイス」と呼ぶ以外にない（射干そして射干玉という言葉を覚えた）。授業に真面目す

ぎる天才詩人である。そして、彼の教育者魂は、朝吹さんの後輩筋に当たる笠井裕之さんに受け継がれ、日吉で笠井さんが教える学生の詩作の授業の中に生きている。ご存じのように、朝吹さんと笠井さんが中心になり、日本を代表する詩人伊藤比呂美さんの協力も得て、この学生たちの詩作の成果は全国的な大学生詩集『インカレポエトリ』として結実し、日本の現代詩の歴史を変えるかもしれない大きな流れを形作っている。(そう言えば、朝吹さんのお嬢さんの芥川賞作家朝吹真理子さんの名作『流跡』に夢中になったこともあった。この作品を佐藤元状さんとわたしで担当した日吉の「文学」の授業で読んだところ、その影響を受けた学生の中から芥川賞作家が生まれたことを、『三田評論』2020年12月号での受賞者遠野遙さんのインタビューで知った。嬉しいかぎり。)

話を自分のことに戻そう。多忙を極めながら、単著を3つ(前述の2冊と2013年の『ビートルズは音楽を超える』)、共編著の教科書を1つ(『愛と戦いのイギリス文化史1900—1950年』)、それから、『チャタレー夫人の恋人』の翻訳などを上梓できたのは、忙しさに由来する研究者としての危機感ゆえだろう。

しかし、それに加えて、コンテンポラリーダンスのダンサーとして活動するというのは、物好き以外の何物でもない。いや、そうではない。言語の内側に閉じこもらずに言語の外に飛び出したいという衝動は前からあった。それは、海野先生に教えていただいたロレンスの芸術言語の精査と言語を超えた参禅体験の同時並行的探究にも繋がってゆく。新人賞をとりそこなった後も、師匠黒沢美香に仕組まれ、彼女のプロデュース&振付で、学部同僚の横山千晶さんとシステムデザインマネジメント研究科の前野隆司さんとで、ミカヅキ会議という塾教員ダンスカンパニーを結成し、JCDN(ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク)の企画に応募すると、採択された。2013年末から2014年3月まで、「渚の風」という作品をたずさえ、鳥取、東京、福岡、京都と全国ツアーを敢行することになった。東京の客は批評家然として冷ややかだったが、地方では熱い反応があった。ここでは、作品内で歌われる歌も作曲している気になり、「世田谷のモーツァルト」を自称して、横山さんには眉をしかめられた。(尚、この時の経験を「黒沢と首くくりの間で、ミカヅキ会議、ふらふらきらきら」と題するエッセイにまとめて、それが『三田文学』(2014年夏季号)に掲載され

たのをきっかけに、『三田文学』スペシャルイベントで、ミカヅキ会議は三田キャンパス東館の大会議室でも、2014 年末に踊った。）

以上、多忙を極めたわたしの「ふたたびの青春」時代の報告である。黒沢美香さんはずっと痛と「共生」していたが、2016 年末に逝去。合掌。

慶應義塾大学法学部（後期）——第3の青春

とこうするうちに、2013 年 9 月に日吉主任の 2 期目の任期が終わり、のんびりできるかと思いきや、2014 年 2 月に長女花が生まれて、今度は子どもの世話に忙殺されるようになった。2014 年度にいただいた特別研究休暇では、主として文芸翻訳に従事した。その成果が、わたしが企画し、作品を選んで、邦訳した『D・H・ロレンス幻視譚集』（2015 年 9 月刊）と、ご高齢で目を悪くされた小野寺健先生から頼まれて、先生の旧訳に手を入れ、新しいケンブリッジ大学出版局版の成果も反映させた『息子と恋人』（2016 年 2 月刊）である。後者はロレンスの最高傑作で、文章の質が著しく高い。それに負けない訳を目指して、疲労困憊した。しかし、小野寺先生に喜んでいただき、褒めていただき、また、法学部の日吉の少人数授業「人文科学特論」でも使って、学生たちにもとても好評だった。翻訳の依頼を受けることも多くなり、新潮社からマーガレット・ドラブルの老人小説『昏い水』（2018 年 2 月刊）とサミュエル・バトラーのディストピア小説『エレホン』（2020 年 7 月刊）の翻訳を上梓し、それぞれ貴重な勉強をさせてもらった。

また、2016 年末のある日、佐藤元状さんから、あらたまって、食事のお誘いがあった。いったい何だろうと思ってゆくと、言いくそくに、日吉で労働組合の加入者が減り、役員人事で苦労していると打ち明ける。要は、日吉支部の委員長を引き受けてもらいたいのだということが分かった。こんな臺^{とう}がたったおじさんでいいのかとも思ったが、困っているようだったから引き受けた。以前より校務の量が増えている中で、労働組合の活動のスリム化が必要と考え、作業を簡略化し、日吉支部の役員数を減らしたりした。法学部の「突貫小僧」坪川達也さんにはここでも大変助けてもらった。他の学部の若い友人もたくさんできた。商学部の巨漢酒井規史さんは、後任探しに来往舎内を走り回

って、いいダイエットになったと言う。日吉労組の事務所には、元 JAL 勤務の美しい書記七里玲子さんもいる。団交に行けば、法人側に日吉の同僚で労務担当理事を務めていた岩波敦子さんも座っていて、嬉しい。労働組合は——もちろん、大学教員にとっても重要なのだが——役員を務めると、厳しい条件で働いている大学病院の看護師、クラブ活動の指導に休日を返上している一貫校の教員の人たちを含めた塾全体の労働状況が分かって、視野が広がる。学部を超えて、一緒に職場を良くしてゆくための貴重な体験もできる。結局、本部委員長も務めて、1年半のあいだ、七里さんとの交友を深め、「たつ吉」で労組の「先輩」大出敦さんにもいろいろと教えてもらった。楽しい仕事だった。

翻訳を4つつづけて出すと、さすがに論文が書きたくなる。最近の論文の1つは偶然の産物で、ロレンスのある未完のユートピア短篇小説を訳した際の発見が元になっている。というのは、自ら作品を選んで訳した『D・H・ロレンス幻視譚集』でその短篇を「人生の夢」と題して訳した時に、最も定評のあるケンブリッジ大学出版局版を底本に使おうとしたら、そのテキストにひどい誤りが多々あることを発見したのである。これはまずいと思って、翻訳の底本にはたまたまコピーを持っていた作者自身の草稿を用いたが、同時に、2017年にロンドンに開かれた国際D・H・ロレンス大会で、そのことを発表したところ、大きな反響があった。発表会場には、ロレンス研究の大御所たちがずらりと並んで、熱心に耳を傾けてくれて、発表後、会場の外に出ると、大御所中の大御所ジョン・ワーゼンに話しかけられ、ケンブリッジ大学出版局のD・H・ロレンス全集編集チームの内幕を打ち明けられたりした。その詳細をここに記すことはできないが、「完璧な組織というのは存在しない」ことは分かった。そして、イギリスのロレンス研究の専門誌 *The Journal of D. H. Lawrence Studies* に、ケンブリッジ版の問題点とともに自分で編集した武藤版を掲載してもらうことになった。大学院時代は嫌っていた本文校訂を自分でやることになり、それが海外で評価されて、気恥ずかしいかぎりである。

しかし、最も大切なのは、自分の仕事の中核を成すD・H・ロレンス研究の成果をまとめて、しっかりした研究書として世に出すことであろう。幸い、法学研究会叢書に申請したところ採択され、2021年9月の現時点では、最後の

仕上げをしている最中である。『D・H・ロレンス研究——作品・思想・本文校訂』という題を予定している。2022 年中には上梓されるだろう。これまでも、それなりにがんばって論文を書いているが、この本の中核を成す論文となる「*Sons and Lovers* と「生」」では、さらなるレベルアップができたのではないかと、思っている。さてどうだろうか。

慶應義塾大学法学部教員としての人生はこれで終わるが、研究自体は好きでやっているのだから、能力の許すかぎり、もう少しつづけていきたい。チャールズ・テイラー、タラル・アサド、磯前順一らの宗教論やフーコーの現代思想を参考にして、『モダニズム文学のスピリチュアリティーズ』と題する新しいモダニズム論を書くというのが、次の目標となる。

しかし、大きな夢は慶應義塾創立 200 年の記念式典である。2058 年の 200 年の式典に 1958 年生まれの 100 歳の元気な塾員として、舞台上に上がりたいと思う。というのは、おそろしく退屈だった創立 150 年の記念式典が最も盛り上がったのは、99 歳の元自転車部の塾員が舞台上に上がって、ただ一言「今年、99 に成りました！」と大声を張り上げた瞬間だったからだ。オリンピックが人々に勇気を与えるのであれば、100 歳の爺が 2058 年の塾生に元気を与えておかしくはない。その際には、すでに絶版になった『チャタレー夫人の恋人』の拙訳を、自分で費用を負担して、未来の塾生たちに配ってもいい。ここまで記してきたように、慶應義塾とわたしの縁は、並大抵のものではない。きっと夢はかなうだろう。そのためにも体を鍛えておきたいと思う。

最後に：「摂理」、Ryoji の代わりに Junji、皆さん本当にありがとう

わたしにとって、この文章を読み返すことが、自分の人生を振り返ることである。読み返してみて、2 つのことが分かった。1 つ目は、再確認になるのだが、やはり、わたしの父は塾法学部出身の武藤任に違いないということである。塾法学部卒業の Keio ボーイから生まれたわたしが、その「問題含み」の性格にもかかわらず、人生の要所要所で塾法学部とのご縁ゆえに、このような幸福な人生をここまで生きてこられたと考えると、つまり「神の摂理」ならぬ「塾法学部の摂理」みたいなものを仮定すると、わたしの人生は、つじつまが

合う。別につじつまを合わせなくてもいいのだが、つじつまが合うのであれば——ニーチェの「永劫回帰」みたいなものだが——その方が、何となく、ありがたい。

2つ目は、ここで書いたものを読み返してみると、本人は真面目に、真剣に生きているつもりだったのだが、文章の至るところからいい加減な性格がにじみ出ていて——朝吹亮二のようになりたかったのに——まるで高田純次である。¹⁾これもまた、冗談が絶えなかった生まれ育った家庭の影響なのかもしれない。特に、心根は優しいが、表面的にはクールで、言語的には「寸鉄人を刺す」母のユーモアに——きっと父は傷ついただろうが——子どものわたしはきたえられた。それに、高田純次の「キャラ」だって、昔の植木等同様、職業的に作ったペルソナなのかもしれない。だが、ここで、「わたしだって真面目なところはある」と力説する必要はないだろう。いや、無駄だろう。むしろ、強調すべきは、このような人間をも受け入れてくれた塾法学部のふところの広さである。大切なのは、振り返ると、重要なポイントで、必ず、塾の法学部が、父を通して、海野先生を通して、巽先生の人事を通して、そして奉職後は、先生方そして学生たちとの交流を通して、わたしを救ってくれたことである。すべての先生方に感謝の意を表したいと思う。そして、**last but not least**, 職員の方々には先生方以上に支えていただいた。特に、日吉で学習指導主任、日吉主任を務めた時に支えてくれた現法学部長秘書の高木信子さんと日吉主任時に法学部長秘書だった鈴木恵子さんには、何と感謝していいのか、言葉が見つからない。高木さんは少し鼻にかかったピロードのような声の持ち主で、その声で優しくしてくれるので、一緒に仕事をしていてとても楽しい。しかし、元陸上長距離(3000m)の選手なので、半端でない根性の持ち主で、つい最近まで自らの花粉症を認めずに、ガッツでがんばっていた。日吉学生部法学部担当のチーフになった際、春の履修申告時にコンピュータを前に作業していた時の必死な表情が忘れがたい。「全集中の呼吸」である。オリンピックと同じくらい

1) 冒頭に記したとおり、わたしは母順子の次男なので、その意味でも Ryoji よりも Junji が似つかわしい。

感動した。鈴木恵子さんも、わたしにとっては「陸上選手」である。彼女が三田の新研究室棟 1 階の廊下を談話室に向かってバーンと走ってきて、何か忘れものを思い出したのか、急に止まって、秘書室に駆け戻ってから、またカモシカみたいに疾駆して戻ってくる姿に、何度、勇気づけられたことか。どうして勇気づけられたか充分に理解はできていないけれども、人が全力で走る姿に生の根源の姿を見たのではないか！ オリンピックと同じである。これらもまた、今、思い出としてよみがえってきた、忘れがたいプルースト的瞬間である。

冒頭に鈴木透君の思い出を書いた。今、一緒に職場を去ってゆく英語部会の 3 人、辻幸夫さん、ジェイムズ・レイサイドさん、太田昭子さんのことを思う。

すると、また、「思い出がわたしに立ちあらわれ」る。辻さんは慶應の大学院の同期で、はじめて話した時から、自然科学のさまざまな領域についてのその博覧強記に驚きっぱなしである。日本認知言語学会の創設にたずさわり、その会長も務めて、学界でも大いに活躍されたことは、わたしとは異なる専門分野なので、詳しいことは分からないけれども、間違いなく大変なことである。レイサイドさんはポリグロット（英・仏・日）の文学研究者なので、彼の凄さはもっとよく理解できる。オックスフォード大学の DLitt とはかくも頭がいいものかということを感じさせられる大変な教養の持ち主で、こちらが英語や英文学について分からないことを訊くと、たちどころに背中のかゆい所に手が届くような説明をしてくれるのに、彼に親鸞の文章の意味を訊かれて、答えられなかったことがある。あの野間宏の難解な、文学史上大変重要な小説を英訳した業績を忘れてはいけない。彼が日吉労組の委員長に就任した時の「システムよりも人間が大事である」ことを聞き手に痛感させる演説にも感動した。と同時に、レイサイドさんはうっかり屋としても天才級である。電車に物を置き忘れてくる。ズボンのポケットに穴が開いていて物が落ちる。若いころは自転車を漕ぎながら、しょっちゅう交通事故に遭っていて、この人は交通事故に遭うのが趣味ではないかと思ったこともある。ともに生きのびて、五体満足な状態で辞められることを、大いに喜ぶべきである。太田さんとは何かと縁が深く、法

学部で奉職した時期もほとんど同じだし、学習指導の仕事も一緒にやらせてもらった。とても上品な人で、言葉遣いが美しい。わたしも太田さんのようにしゃべりたい。でも彼女もかなりのうっかり屋の部類に入って、いや、心配性で、万が一の時を考えてあれもこれもとってしまうのか、いつも大きな荷物を引きずって、その荷物の一部を持たせてもらうのがわたしの習慣になり、喜びにもなった。今のわたしの身体は、太田さんの荷物を見ると、反射的に動き出すようになっている。そして、何と言っても、太田さんが素晴らしいのは、そのまったく裏表のない性格である。率直な意見交換が出来るのが、職場の同僚として何よりもありがたかった。おかげで、学習指導の仕事でも、笑いながら難局を乗り切ることができた。

さて、なつかしい思い出にあふれて、すべての方々に、感謝の念を抱きつつ——かつわたしの「問題含み」の性格ゆえにご迷惑をかけた方々には申し訳なく思いつつ——今、慶應義塾大学法学部という最高の職場を去ってゆく。皆さん、どうもありがとうございました。